

西の風雪』と後に本となりましたが、その取材に参った時のことでした。先生は早速高木会長はじめ、史談会の有志を集められました。それは堅田合戦のことを知りたいたいとお願ひしたからです。

その次は西南の役、陸地峠の戦闘を調査するため、佐伯を訪れました。前回より数年経過していました。龍護寺の御自宅に伺いますと、「田に行っている」と奥様が申されます。龍護寺の稲の穂が黄色く、あちこちの田は刈とられ、その田圃の一角の道路にジープを止め、挨拶致しますと、広い田の中に、野良着で笑顔を私の方に振り向けました。その姿が今に印象に残っています。

それからお自宅に伺い、例のガリ版のある部屋で、柿を馳走になりながら四方山の話を承り、御城の奥、図書館から少し離れたところの旅館（名は失念）をお世話下さいまして、夕餉を共にいたしました。

『兵旅の賦 明治・大正』が完成し、贈呈のためお伺ひした時が三回目でした。なぜならば、先生から熊本鎮台の西南の役の日記を拝借していたからです。

遠来のあまり御交際の少い人にも、親身になって、その人の欲しいものを御世話下さるその人徳、佐伯の顕彰

すべき人間の一人ではないでしょうか。

私の手許に御送付頂いたガリ版の『佐伯史談』がございませう。新に印刷となってからも史談を毎月送って頂きました。有難く頂き、御礼を兼ね浅学でありながら、勝手なこととも羅列いたしましたのですが、一度も御叱声なく、黙々と御送付頂きました。

ところが御亡くなりなされた時は、韓国に取材の旅にかけて居り、今月号を見て驚倒した幸いです。やはり佐伯と福岡は遠かったと、しみじみ思っているところで

す。

時は少しも待つてはくれません。もう少し御存命ならば、次の本『海狼記』を御贈呈できたものにと、遅々とした自己の人生が悔しくてなりません。

## 故羽柴 弘氏の長逝を悼む

佐 伯 八重子

（賛助会員・宮崎市）

故羽柴氏の御逝去を悼みその御遺徳を偲んで一文を寄せます。

氏は、我が祖先遺領の地、豊後佐伯に生れ育ち、教職

に長く奉職され郷土に尽くされました。早くから佐伯の風土、文物に多大の興味を持たれ、退職されるや同志とともに佐伯史談会を設立され、深い研究を積まれ、多くの郷土の埋もれた文化、遺跡とうを尋ね、掘りおこされ、更に先人の遺徳を偲び顕彰されるなど、郷土人士の深い関心を呼び起こされた。

その偉大な功績は永遠に郷土人士の胸に、また私共佐伯に縁の有る者の胸に残るでありましょう。

氏はまた中世佐伯領主佐伯氏の数々の史料や文献の研究発表、郷土人士への啓蒙など枚挙にいとまなく、まことに偉大な郷土史家であられた。

突然の御長逝は痛恨の極みであります。

特に、私共佐伯氏の流れを汲む他国流浪の一族に取って、氏はそのよき理解者であり、優れた知識と見識を持たれ、よく我が一族が佐伯氏の後裔であることを見きわめて下され、同族会の創立に尽力され、同族相互間の所在、連携に多大の御協力を頂き、昨秋目出度く同族一堂に会し、互いに幾百年を越えて親睦する機を得ました。

その際、第十三代佐伯惟真公の奥津城を一同の手によって移葬し、御供養することができました。これはみな

史談会・郷土の方々並びに氏の御協力による処、大でありました。

佐伯氏伊豫に落人としてより四百有餘年の長きにわたって、他国の地に没し去られた御先祖も漸く本に復してその一族として光りに当てられるを得られました。御祖先共々子孫の私共の喜び、感謝の思いは筆舌に尽くし難いものがあります。心から深く御礼申し上げます。

まことに惜しい人を亡くしました。御寿命とは申しながらこのように早く御逝去なされたことは、まことに残念であり、心から痛恨にたえません。今しばらく御健在でいて欲しかった、との思いのみ胸に去来しております。しかし御寿命は如何ともなし難く、天を仰いで嘆息するのみです。

今ここに謹んで、氏の長き眠りの安らかならんことを衷心より願って、つたない筆をおきます。

御冥福を祈り上げます。 合掌

郷土誌に燃と輝く碩学の巨星逝きて光芒長し